

オーエンの地理教育

井内 昇

以下は或る授業風景の描写である。

『彼らの地理の時間も、子供たち自身にとって同様にたのしいものであり、外来者たちにとっても興味あるものであった。ごく幼い時に彼らは各級で四地域にわたる世界地図について教えられ、その知識に熟達してからすべての級が講堂に一つの大クラスとして合併され、ほとんどその室の両端に達するばかり大きい世界地図についての、こうした練習をやりとげるのだ。地図の上には最も良い地図にある普通の区分は描かれているが、国や都会や町の名は省かれていた。ただ都会や町にはその場所を示すために小さいが明瞭な円がつけてある。一この目的のために合併された各級は大体150人ぐらいからなっていて、その地図を坐っていて見られるだけの大きさの環をつくっていた。一番小さい子供にその地図の一番高い所が指せるくらいの軽い白い棒が備えてあった。課業は一人の子が指すためにその棒をとりあげることによって始まる。次に彼らの中の一人が彼にしかじかの地方・場所・島・都市あるいは町を指せと求める。普通これがくりかえしくりかえしつづけられるのだ。しかし棒をもっている者が、わからなくなって求められた場所を指せなくなった場合には、彼はその棒をその質問者に渡さなくてはならぬ。そこでその質問者が同じことをやってゆくのだ。ところが子供たちはまもなく、ほとんど考えていない地方とか場所とかをきいて、棒をもつ者を困らせ、その棒を手に入れることをおぼえたので、これは子供たちに段々とおもしろいことになった。これは一度に百五十人によく課業をした、一その時間中常に生々とした注意を保たすことによって、参観人も子供と同様におもしろがり、大抵同じくらい多くのものを教えられた。かようにして子供らは幼くてすでに才分をもったから、世界を週航してきたわが海軍将官の一人をして、これらの六才にもならぬ子供のある者がたちどころにその場所を最も正しく示して答えうるごとき質問の大部分に答えられまいと、いわしめたほどであった』

このような地図を使った授業風景は、わが国で

も戦前から小学校などではそれ程珍しいものではなかったが、文章の終わりの部分でこの授業を受けているのが6才未満の幼児であることを知らされると、少し首をかしげたくなるかも知れない。この文章は、岩波文庫の「オーエン自叙伝」(R.オーエン著；五島茂訳)から引用したが、この授業風景は1810年代のものなのである。

昭和62年春から3年間、附属小学校にかかわることになったが、丁度この時期に文部省の学習指導要領の改訂が発表され、その目玉のひとつとして小学校に平成4年度から「生活科」が導入されることになった。たまたま附属小学校では、昭和51年度から「創造活動」という名のもとにこの生活科を先取りする形で実験教育を積み重ねてきたために全国の小学校の先生方の注目の的となり、私もその勉強をする破目になった。その中で出会ったのがオーエンの一連の教育実践であった。

R.オーエンについては、すでに30年も前から「町づくり」との関連でその思想や行動に興味があったが、教育実践においての、いいかえれば「人づくり」というもうひとつの面でのオーエンを知ることで、それまでよく見えなかったニュー・ラナークにおける彼のユートピア建設の幾つかの切り口が少し見えてきた気がする。

オーエンは、経営者として接した労働者の実態から人間性についての独自の人間観を育て、「人間の性格は、神すなわち自然により、および社会によって形成される」という結論に達し、1813年、「性格形成論」を著すと共に、1816年に性格形成学院を、1817年にオーエンスクールをニュー・ラナークに開設し、その人間教育の理念を実践に移している。

その人間教育の実践でとり入れたのが「生活教育」であり、この教育法は同時代のペスタロッチや20世紀初のデューイを経て「生活科」につながっているが、現場、自然の中での観察、体験を重視する「生活教育」は地理とも密接な関係があり、上述の世界地図を用いた方法も「生活教育」の一環であった。